

渡来裂「ちょろけん」と丹波の織物

奥 村 萬 亀 子

Relationship between imported textile “Choroken” and a kind of textile produced in Tanba district.

MAKIKO OKUMURA

抄文：丹波福知山地方に「ちょろけん」と呼ばれる手織の自家用織物がある。ところが「ちょろけん」とは江戸時代唐船や紅毛船により舶載され珍重された渡来裂であり、その名は早くに定着しているがその定義や使用例に不明な点が多い。この二つの裂の関係を「木目文様」を鍵として考察する。
(1996年 9 月12日受理)

「ちょろけん」は江戸時代に唐船や紅毛船により輸入されたいわゆる渡来裂である。現在ではその名を知る人も少ない。ここにその「ちょろけん」を取りあげようとするのは、京都府福知山市地域を中心に集められた「丹波生活衣コレクション」¹⁾の中に、この呼称で呼ばれるこの地方の手織裂のあることを知ったことからである。福知山地方は由良川流域にある古くからの養蚕地で、文化11年（1814）刊の成田思斎著『蚕飼絹飾大成』にも「蚕業を営む国」としてこの「由良川流域」があげられている。明治以降、隣接する何鹿郡に郡是製糸株式会社が創設（明治29年）されたことにとともに、養蚕が益々盛んとなり、絹の自家用織物が比較的近年まで織り続けられた。そうした自家用絹織物の一つに「ちょろけん」と呼ばれる織物がある。白糸と紺糸を撚ったいわゆる空糸による織で、この糸も「ちょろけん糸」と呼んでいる（写真⑥）。白糸と紺糸の撚りを均等に入れるのは非常に熟練を要するむづかしい仕事であり、家族への愛情を込めた手間ひまかけた織物であるという。「ちょろけん糸」を経にだけ使ったもの、経緯両方に使ったもの、経緯・緯緯の一部に使ったものなどがあり、主として男女のよそ行きの着物に用いたが、蒲団布の一部などにも使っている（写真⑦～⑫）。

この丹波の「ちょろけん」が近世初期渡来裂「ちょろけん」と直線的に繋がるものとは思えないが、「ちょろけん」という呼称が使われていることは事実であり、このことは一地方の庶民の服飾美への希求が奈辺にあったかを示唆するものであろう。服飾品の場合、

実物と言葉との乖離の中で伝播が行われることも多い。この二つの「ちょろけん」はどのような関係としてとらえることが出来るだろうか。疑問点をたどりながら以下の順に論を進めることとする。

（1）「ちょろけん」の渡来 （2）「ちょろけん」の特徴 （3）「ちょろけん」の知名度 （4）「ちょろけん」の周辺

（1）

「ちょろけん」がいつ頃からわが国にもたらされるようになったかは明らかにしがたいが、徳川家康の遺品の中にその名が見られることから少なくとも16世紀末から17世紀初頭には舶載品としてもたらされていたことは確かである。元和2年4月17日（1616）、75才を以て薨じた家康の遺産の数々は、尾張義直、駿河頼宣、水戸頼房の三子に分与されたと伝えられ、それらの遺産目録である『尾州家本駿府御分物帳』『水戸家本駿府御分物帳』には尨大な染織品が列挙されている。その中の「尾州分」に「ちょろけん・三端」、「水戸分」に「ちょろけん・二端」の記載がある²⁾。この数量からするとそう多く舶載されるものではなく、珍しい品だったのであろうと想像される。「ちょろけん」が渡来品として珍重されたいことは江戸幕府へ参内するオランダ人が献納する貢物の中にその名が見えることからうかがえる。『徳川実紀』によると、『大猷院殿御実紀』³⁾寛永15年（1638）4月5日の条に、

入貢蘭人まうのぼり。酒井讃岐守忠勝に謁え方

物を奉る。算留縞二十卷。綸子十卷。ちよろけん五卷。天鷲絨二卷。各色羅紗七臺。(後略)
とあるのが最初で、続いて同書慶安3年(1650)3月7日の条には、

阿蘭人貢物を奉る。(中略) さきに南部浦へ漂着の蘭人をかへし給はりしを謝して。彼国主より。大鏡。花氈。金装千里鏡。猩々緋。彩色羅紗。奥縞。みいら。例の貢物は猩々緋。彩色羅紗。白羅紗。小羅紗。毛ちよろけん。金入はるせ。色ふらた。白糸。緋綸子。更紗。(後略)

と記され、ここに「ちよろけん」「毛ちよろけん」の名が見える。同様に『嚴有院殿御実紀』⁴⁾には、

慶安4年(1651)12月28日の条に毛ちよろけん三反。
承安2年(1653)正月15日の条にちよろけん二種。
明暦元年(1655)正月15日の条にちよろけん一種。
明暦2年(1656)正月15日の条にちよろけん一種。
万治2年(1659)2月28日の条にちよろけん一種。
寛文元年(1661)3月3日の条にちよろけん一種。
寛文4年(1664)3月28日の条にちよろけん一種。

とかなり頻繁に登場するが、その後は七十余年も後の『有徳院殿御実紀』⁵⁾元文5年(1740)2月28日の条に「ちよろけん一種」の記事があり、以後幕末に至るまで『徳川実紀』の「入貢蘭人」の項の貢物にその名はみえない。このことは「ちよろけん」産地側の事情によるものなのか、受け取る側の好尚の変化を意味するものなのか多くの疑問をいだかせる。

一方、輸入の実状を示す資料での「ちよろけん」の輸入状況を『唐蛮貨物帳』⁶⁾に見てみよう。これは「出島貿易について(中略)当時の出島商館の記録よりも、より正確である」と指摘されるもので⁷⁾、宝永6年(1709)から正徳3年(1713)にかけての記録であり、当時の輸入品の概容を見ることができる。輸入裂類については特に記載が多く(船ごとによる記載件数は優に百件を越える)、裂の種類と数量は尨大なものである。ところがその中で「ちよろけん」というと僅か五ヶ所にその名を見るだけである。

○宝永6丑年(1709)7月28日 五拾四番厦門出し 唐船貨物改帳に「色ちよろけん 拾四端」

○宝永7寅年(1710)12月8日 代物替唐船壹艘切之勘定帳 三拾番廣東船に「ちよろけん 拾八端 但壹端ニ付百拾八匁八分七厘五毛宛」

○同 三拾壹番廣東船には「ちよろけん 一端 代銀八拾目五分」

○正徳元卯年(1711)7月12日 壹番咬啗吧出シ阿蘭陀船荷物改帳のうち「役者荷物之覚」⁸⁾に「ちよろけん 壹端」

○正徳2辰年(1712)6月20日 三拾壹番廣東出し 唐船貨物改帳に「黒ちよろけん 五端」「色ちよろけん 五端」

これらそれぞれの裂類に関する記述箇所を〔表〕とす

る。これによると「ちよろけん」の輸入量は極端に少ない。「びろふど」「紋かいき」など数量の少ないものもあるが、これらは他船の記載に恒常的に見られるものである。それに対し「ちよろけん」は積載している船そのものが少なく、積載量も非常に少ない。その意味で珍品であったのではないかとと思われる。

西川如見(1648-1724)は元禄年間(1688 1703)に『華夷通商考』をあらわしているが、宝永5年(1708)に訂正増補されたという版⁹⁾によると、巻之二「廣東省」の土産の項に

白絲、黄絲、錦、金緞、二彩、五絲、七絲、
天鷲絨、八絲、閃緞、鎖服、柳條、綾子、縞
紗、紗綾、絹紬、紵、綿、紬、絹、

| 五十四番厦門出し 唐船貨物改帳 宝永六丑年七月廿八日 | | | |
|----------------------------|------|-----------|------|
| 1 飛紋さや | 20端 | 1 紋なしさや | 2端 |
| 1 色しゆす | 55ヶ | 1 黒しゆす | 259ヶ |
| 1 嶋しゆす | 37ヶ | 1 緋しゆす | 1ヶ |
| 1 続白しゆす | 5ヶ | 1 続黒しゆす | 16ヶ |
| 1 色緞子 | 54ヶ | 1 黒びらふと | 41ヶ |
| 1 色びらふと | 14ヶ | 1 嶋びらふと | 5ヶ |
| 1 緋びらふと | 1ヶ | 1 木綿ろまか嶋 | 12ヶ |
| 1 色ちよろけん | 14ヶ | 1 嶋めんちう | 56ヶ |
| 1 さらさ | 153ヶ | 1 さらさふとん表 | 822 |

| 代物替唐船壹艘切之勘定帳 宝永七寅年十二月八日 | | | |
|-------------------------|------|------|--------------|
| 三拾番広東船 | | | |
| 1 黒しゆす | 42端 | 壹端に付 | 193匁0分1厘9毛 |
| 1 色しゆす | 45ヶ | | 210ヶ4ヶ8ヶ |
| 1 嶋しゆす | 9ヶ | | 220ヶ8ヶ |
| 1 色どんす | 5ヶ | | 153ヶ8ヶ |
| 1 色紋茶宇 | 13ヶ | | 128ヶ |
| 1 ちよろけん | 16ヶ | | 118ヶ8ヶ7ヶ5ヶ |
| 1 紗金 | 20ヶ | | 58ヶ5ヶ |
| 1 色さや | 31ヶ | | 21ヶ3ヶ3ヶ2ヶ |
| 三十壹番広東船 | | | |
| 1 色緞子 | 52端 | 壹端に付 | 157匁3分0厘4毛6弗 |
| 1 嶋緞子 | 22ヶ | | 42ヶ5ヶ |
| 1 色しゆす | 112ヶ | | 200ヶ7ヶ8ヶ6ヶ9ヶ |
| 1 嶋しゆす | 18ヶ | | 225ヶ8ヶ4ヶ4ヶ4ヶ |
| 1 黒茶宇 | 5ヶ | | 101ヶ5ヶ |
| 1 嶋茶宇 | 10ヶ | | 133ヶ2ヶ |
| 1 紋茶宇 | 51ヶ | | 160ヶ6ヶ4ヶ7ヶ |
| 1 紗金 | 18ヶ | | 55ヶ4ヶ |
| 1 けんちう | 22ヶ | 壹尺に付 | 7ヶ6ヶ6ヶ6ヶ |
| 1 白けんちう | 13ヶ | | 7ヶ9ヶ2ヶ |
| 1 形付北絹 | 35ヶ | 壹端に付 | 15ヶ3ヶ2ヶ8ヶ5ヶ |
| 1 ちよろけん | 1ヶ | | 80ヶ5ヶ |
| 1 へるへとあん | 2ヶ | | 341ヶ9ヶ |

| 壱番咬啗吧出シ 阿蘭陀船荷物改帳 | | | |
|------------------|-------|----------|---------|
| 正徳元卯年七月十二日 | | 役者漕者荷物之覚 | |
| 1 羅紗 | 6端ト1切 | さるぜ | 1端ト2切 |
| 1 ころふくれん | 14℃ | 赤すためん | 1℃ |
| 大かいき | 882℃ | 1 並かいき | 80℃ |
| 紋かいき | 1℃ | 1 黒縹子 | 305℃ト1℃ |
| 1 嶋縹子 | 1℃ | 1 嶋天鷲絨 | 1℃ |
| 1 とんす | 41℃ | 1 錦 | 1℃ |
| 1 縹珎 | 4℃ | 1 紋茶宇 | 3℃ |
| ちょろけん | 1℃ | 1 小巻綸子 | 114℃ |
| 東京綸子 | 47℃ | 1 白縮緬 | 45℃ト28℃ |
| 1 紅縮緬 | 2℃ | 1 しょうろん | 1℃ト1℃ |
| 1 さりん | 1℃ | 1 こんてれき嶋 | 3℃ |
| 1 大木綿 | 21℃ | 金巾 | 19℃ |
| 1 さらさ | 7℃ | 1 もめん嶋 | 5℃ |

| 三十壱番広東出シ 唐船貨物改帳 正徳武辰年六月廿日 | | | |
|---------------------------|------|----------|------|
| 1 大飛紋さや | 81端 | 1 続大飛紋さや | 15端 |
| 1 黒しゆす | 281℃ | 1 色しゆす | 313℃ |
| 1 紋嶋しゆす | 30℃ | 1 色嶋しゆす | 59℃ |
| 1 色緞子 | 392℃ | 1 紋嶋緞子 | 100℃ |
| 1 色紋茶宇 | 261℃ | 1 色嶋茶宇 | 278℃ |
| 1 嶋紋ふふつ | 79℃ | 1 黒びらふど | 1℃ |
| 1 へるへとあん | 25℃ | 1 黒ちょろけん | 5℃ |
| 1 色ちょろけん | 5℃ | 1 けんちう | 35℃ |
| 1 続けんちう | 25℃ | 1 紋付木綿 | 14℃ |

(以上 『唐蜜貨物帳』より作成)

卷之四「阿蘭陀」の土産の項には、

猩々緋、ラシャ糸、ラセイタ、サルゼ、カルサイ、ヘルヘトワン、バレイタ、サエツ、アルメンサイ、ヘルサイ、ゴロフクレン、スタイン^蠟、サアイ、ブラアタ、レイガドウル、^{チョロケン}、カベチョコロ、ドンス、タビイ、シュス、毛ビロウド、ヲランダ金入、ヲランダ錦、チャ宇島、金ザラサ、ヲランダ箔

と糸・織物類があげられており、「鎖服」「^{チョロケン}」の記述がみえる。同書は「長崎へ入津ノ阿蘭陀船」について、「本国ヨリ直ニ来ル事ナシ、咬啗吧、暹羅等ノ国々ヨリ其土産荷物ヲ積テ長崎へ来ル也、此船昔ハ平戸へ入津セシヲ寛永拾八年ヨリ長崎へ入津セシム、其ヨリ不_レ絶毎年入津ス。咬啗吧ヲ五月ノ中節以後出船シテ、七月ノ初節長崎ニ入津ス、八月九月ノ間荷物有テ、九月廿日定テ帰帆ス…」と解説しており、阿蘭陀土産とはいっても種々な国々からの土産を積んで入港すると説明している。このような『華夷通商考』の記述は『唐蜜貨物帳』の記載と符合する。正徳2年(1712)刊の寺島良安編『和漢三才図会』¹⁰⁾も、

鎖服、出_ル於阿蘭陀及廣東^{ヨリ}

としており、当時「ちょろけん」については一般にこ

のように認識されていたものと考えられる。

また享保寅の年¹¹⁾竹田竹本初芝居とされる近松門左衛門作『唐船嘶今国姓爺』¹²⁾は、暴君六安王を攻め福建を平定した順成王の物語であるが、その中に土中に埋もれたかねを音頭^{うちば}をとりながら掘り出す場面がある。「おんどの唐人^{うちば}団をかざし口拍子、日本の木やりはゑいやらや、からの木やりはけゝらは、けゝらはほにほう」とはじまり、唐の木遣がしまかせに舶来品の名を綴り合わせて無意味に長々と語られる。その中に「かべちょろちょろちょろちょろけんあるめんさい」とうたわれ「さるぜ」「いんでん」などの語も連ねられる。ここでは一般に唐船によって搬入される品として「ちょろけん」の名もあげられているのであり、特に福建と関係あるものとみただけでもなかろう。しかし宝暦5年(1755)刊の柳堤居皆阿著、滑稽本『花菖蒲待乳問答』¹³⁾は、呉服商として成功している富田屋長右衛門の店の様子を描いて、

見世にはあらゆる織物の数々多^{わたり}き唐物には^{蜀江}の錦。廣東の金緞。福建の鎖服。浙江の五^{やう}絲。

と各地からのわたりものを並べ、「ちょろけん」は福建のものとしている。

このようにその出自についてはいささかあいまいな認識のまま受けとられている¹⁴⁾。ともかくも唐船や蘭船によって舶載される裂という海外への憧れを宿したものであったのであろう。

(2)

ところで「ちょろけん」とはどのような織物だったのだろうか。実物資料に徳川美術館蔵品がある。前掲「尾州家本駿府御分物帳」記載のものに当たるものか。

①「銀モクチョロケン」(写真①)

かなり厚手で堅い灰色の絹織物で表面側に緯一越目に銀糸が織り込まれた畦織物である。布幅の中央に折り目があり、ここから左右対称に横方向の木目文が広がっている。

②「金モクチョロケン」

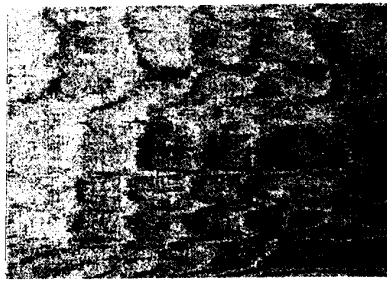
やや厚手でパシッとした感じの金茶色の絹織物。平織で美しい光沢がある。経糸にゆるい撚り。布幅中央から対称形に大柄の木目文様が縦方向に広がっている。

③「チョロケン地銀入毛織¹⁵⁾」

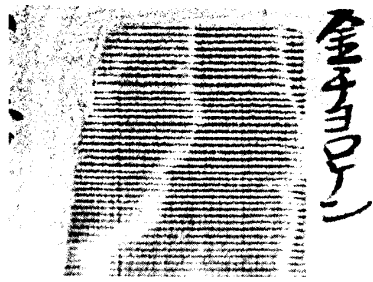
薄手の白絹地に紺糸と銀糸の細い縦縞が1 cm 余りの間隔で入っている。

この三例のうち①②はモク文様という点で共通性が見られるが、③と他との共通項が認め難い。

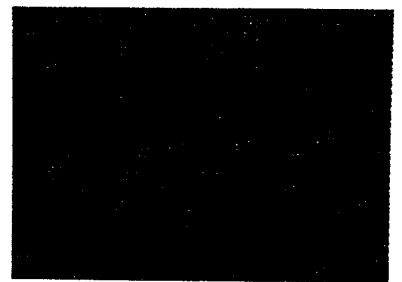
もう一つの例に東京国立博物館所蔵の「文化十一年當戊歳紅毛渡端物切本 岸村猪三郎」と「文化十一年當戊歳紅毛船持渡端物切本 芦塚太郎八」に貼付された



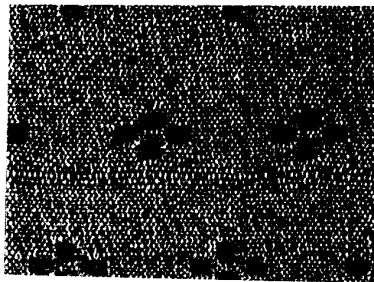
①



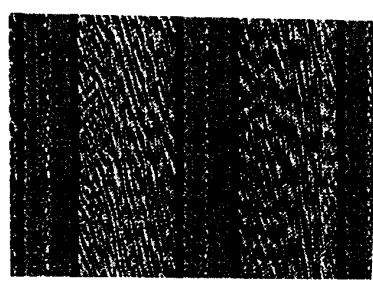
②



③



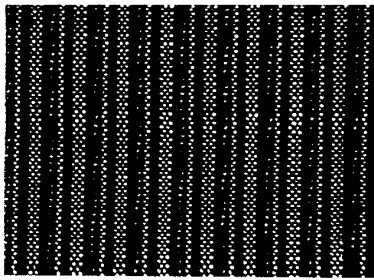
④



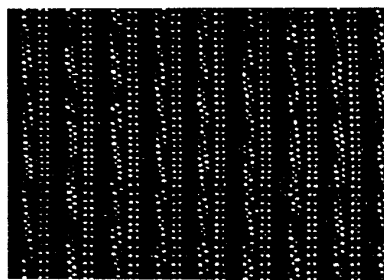
⑤



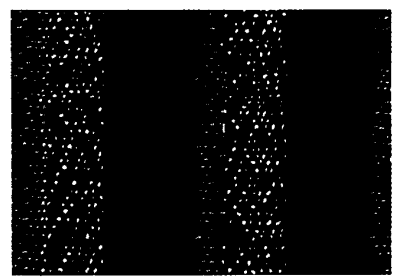
⑥



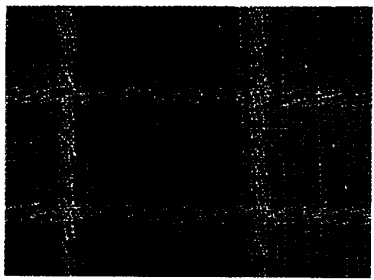
⑦



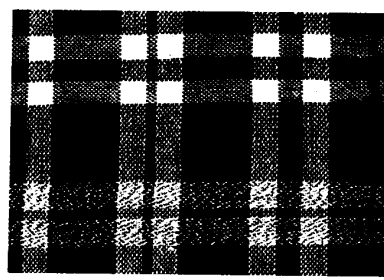
⑧



⑨



⑩



⑪



⑫

- ① 銀モクチョロケン(徳川美術館蔵)
 ② 金チョロケン(東京国立博物館蔵)
 ③ 納戸退紅空文海気(京都国立博物館蔵)
 ④ 木理に四つ目文様チョロ織(京都国立博物館蔵)

- ⑤ 段に空目モール織(陽明文庫蔵)
 ⑥ 丹波ちよろけん糸(福知山市蔵)
 ⑦~⑫ 丹波織物(福知山市および個人蔵)

「金チョロケン」がある¹⁶⁾。(写真②) この二つの裂は同一のものを切り取ったとみられる。金色にキラキラと輝く厚手の織りで木目文様が浮き出ている。緯糸は比較的太く畦織りで二越目に平銀糸が表面側に入れている。木目の効果はこの緯がプレスにより微妙

に縫じられることによって出されている。これについては小笠原小枝氏・石田千尋氏の研究があり¹⁷⁾、石田氏はこの文化11年の端物切本の「金チョロケン」はオランダ側の積荷リストでは「金モフル」(Goud Moor)になっており、他の品目で日本側の反物目利が品名を

誤って記載している場合は訂正が行われているのに「金チョロケン」の場合は「反物目利の鑑定を優先させて称されたものと考えられる」といわれる。また小笠原氏は反物目利が「金チョロケン」とした理由は、織製後にプレス加工した木目状の文様があることによったのではないかといわれる。つまり反物目利はこうした「木目文様」を「ちょろけん」と認識していたのであろう。ここにあげた例はいずれも非常に高級な織物と思われるが、前掲『唐蛮貨物帳』宝永7年の記載によると（表参照）ちょろけんは茶字類より安価である。記載にも「ちょろけん」「色ちょろけん」「黒ちょろけん」「毛ちょろけん」などがあり品質にも多種のものがあつたのだろうか。

それでは「ちょろけん」という織物は一般にはどのように認識されていたのだろうか。寛文4年（1664）に編まれた『俳諧藪香物』¹⁸⁾には、

毛衣といは、雉子のはちょろけん 台魯の一句がある。雉子の毛はちょうど「ちょろけん」のような羽毛であるというのであろう。同書の俳者句数の項によると台魯は尾張の人で「廿九句」とあり、メンバーの中ではかなり有力の人であつたことがうかがえる。このように「ちょろけん」が句に仕立てられるところを見ると、この裂が興味を惹くものであり、そしてその特徴が「雉子の羽毛」のようであるということに俳諧味をきかし、しかもこの素材を取り上げること自体にしゃれた新味があつたのだらうと思われる。それではその雉子の羽毛とはどんなものなのだろうか。雉子は雌雄で大きさや羽毛を著しく異にしている。雄の羽毛は「背は青緑色の光沢ある黒で黄色の羽縁がある。肩羽は褐色で黒と黄白色の羽縁がある。腰の羽毛は長く伸び緑褐色、外側のものは青白色」、雌は「全体黄褐色の地に黒褐色の斑紋」¹⁹⁾と説明される。徳川美術館蔵品の如き木目文様はまさに雉子の羽毛の波状を思ふすものである。

「ちょろけん」の特性を「木目文様」に見ようとする見方は、元禄期には定着していたようである。当時庶民にとって文字教育の役目を果たした「いろは」引きの辞書である節用集では、元禄3年（1690）4月刊の『頭書大益節用集綱目』²⁰⁾に「著羅絹」が取り上げられ、その頭書に「木を織付たる衣なり」と解説がある。「木」すなわち「木目文様」である。また『和漢三才図会』²¹⁾の場合をみると、「ちょろけん」は「加伊岐」の項に含めて「正字未詳 鎖服 知与呂介弁」とあり、「似_レ加伊岐_ニ而有_二標文_一」と説明されている。図には無地裂の巻物二本と、「鎖服」と添え書きした木目文様のある裂の巻物が描かれている。「標文」とは「もくめ文・木目のあや」の意である。「加伊岐」については「其絲上品ナリ 有_レ黄有_レ赤有_レ茶色而舊渡_リ者_ハ地厚_ク後渡_リ者_ハ稍薄_シ本朝_ニ未_レ織_レ之」とあるだけで、この記事をみる限り「加伊岐」と「鎖服」

の特徴や差違がはっきりしないが、京都国立博物館蔵の前田家伝来裂に「納戸退紅空文海気」²²⁾があり、(写真③)この「寛文改元前後から享保にかけてかなり長寿の人」²³⁾であつたという著者が、徳川美術館蔵の「銀モクチョロケン」とこの「空文海気」に類するものを並べ考えたとするならば、この記述は理解できるのである。

さて、ここに見て来た「ちょろけん」と「丹波ちょろけん」とはおおよそかけ離れたものである。ところが一方、前田家伝来名物裂に「チョロ織」といわれる例がある。『京都国立博物館蔵前田家伝来名物裂』²⁴⁾により見てみよう。

①「七ツ目入り変わり格子文様チョロ織」

赤と紺を基調にした縦長の格子で、幅の片側（11.6cm）には太い格子を配しこの部分には七ツ目が経の浮きによって入れられる。他の部分（43.5cm）は細い縦縞が強調される。平組織で経はZ撚りがかかり緯は引きそろえの生糸と説明される。

②「縞格子チョロ織」

経は蘇芳、浅葱、萌葱、白、濃萌葱の五色を繰り返し、緯は萌葱濃淡、萌葱と茶濃淡でそれぞれ格子とし段替りになっている。平組織で経はいずれもS撚りで丸味のある美しい糸。緯も軽くS撚りがみられるとされる。

③「木理に四ツ目文様チョロ織」（写真④）

経は白と濃丁子、緯は濃丁子で木理状の地に四つ目菱を緯浮で表わしている。平組織で経はきわめてわずかS撚りがかかる。緯は引そろえという。

以上三つの織物のその他の性状などについては注にまとめて記す²⁵⁾。前田家名物裂については同書に「茶の湯に精通した三代前田利常が、寛永14年（1637）当時海外に向けて唯一の門戸であり舶来の品々が充ちていた長崎へ、家臣の矢野所左衛門らを遣り、万金を投じて購めさせたのがその始め」で「同家伝来の名物裂中にはより古く我が国に将来されていたと考えられるものを含んで」と松下隆章氏の解説がある。「チョロ織」の墨書をつけて包まれているこの三点も、当時このようにして収集されたものであろうが、この三点のどこに「チョロ織」としての共通した特徴があるのか、ここでも理解に苦しむ。少なくとも外見上は共通した点がみられない。強いて言うならば平組織であること経糸に撚りがかかっていること、やや地厚であることぐらいである。縞文様は海気にも茶字にも見られるし、特徴らしく見える浮き目文は①③には見られるが②には見られない。勿論木目文様もここでは一例だけしか見られない。龍村謙氏はこの③の裂のチョロに「鳥羽」の字を当てチョロ（鳥羽）絹としておられる²⁶⁾。前述の徳川美術館蔵「銀モクチョロケン」が雄

雉子の羽毛のようだとするならば、この前田家伝来の「木理に四つ目文様チョロ織」は雌雉子の羽毛のようである。この二色の糸を撚り合わせその織り効果によって木目文様を出す方法は丹波の「ちょろけん」の場合と同様である。この種の渡来裂としては、「チョロ」の名は付されていないが近衛家伝来の裂に一例をみる²⁷⁾ことができる。近衛家21代近衛家熙(1667-1736)の好みにより収集されたもので「段に杳目モール織」の名で、16-18世紀のペルシャのモールと解説されている²⁷⁾。(写真⑤)同裂は『名物裂類集』²⁸⁾(龍村謙解説)によると「杳目撚間道」と命名される。これは黄色のモール部分にはさまれた部分が紺と白の撚り糸による木目文様になっており、この部分はまさに丹波の「ちょろけん」を思わせる。丹波の「ちょろけん」は実体としてはこれらの織を範とするものであろうか。

とはいえ、いわゆる「ちょろけん」の木目文様と、この二色の撚り糸(杳糸)による木目文様とは、同じ木目文様とは云いながら全く異なるものである。なお「チョロ織」と「ちょろけん」との関係についても不明である。

(3)

このように不明な点の多い「ちょろけん」が実際どのように使用されたかを知ることのできる資料もまた少ない。実物例としては徳川博物館蔵品に「煤竹チョロケン下着」があり、袷で表裏とも木目風織のチョロケンを使っているとされる。また「浅葱綸子カルサン」は紐にこれと同じチョロケンを使っている。これらは『東照宮御讓品御入記水戸分』に記載があり、

「一 御下着 七」のうちに

「一ハ煤竹ちょろけん御単御襟あさぎ縹子」とあり、また

「一 御かるさん 四」のうちに

「一ハ緋綸子御紐茶ちょろけん」

「一ハ同浅黄綸子御紐ちょろけん」とある²⁹⁾。桃山から江戸初期の実物資料である。

また井原西鶴による『好色一代男』³⁰⁾〔天和2年(1682)初版〕第七「諸分の日帳」に一例が見られるがどう使われたものかはわからない。

さてかた様御残し置候^{ひとりわら}独笑ひの御肌着、十四日に與風御事共の思ひ出し、下に着て出申候を庄介様にもらひ懸られ、否とはいはれぬ首尾にてころよく進^{ありあひ}じ申候、何の子細もなく候、一日二日過てちょろけん一卷有合て送るのよし、其中に一步五十、此事は何とも書ずに人しれずたまはりける。其まま明ても見ず、せはしく申せし呉服屋の左兵衛に遣し申候

これは木村屋の遊女和州が世之介に送った日帳の一節である。世之介が残して行った春画を描いた肌着を、

ふと世之介を思い出して着て出たところが、これを欲しいといわれ断りも出来ずあげてしまった。その御礼が一・二日経ってちょろけん一卷をありあわせのものとして送って来たというのである。この送り主の庄介という男は「唐津の庄介様」として出て来る人物で、「去年の盆をしてもらひ候客也」とある。九州の羽振りの良い商人であろう庄介が、遊女からもらった珍品の礼として贈ったのがちょろけん一卷である。おそらくこの「ちょろけん一卷」はその珍品の返礼に値するだけのものであったのだろう。外来船の入港する土地柄だけにこうした珍貴な巻物を入手することの出来る唐津の商人を西鶴は巧みに描いている。

このように上流武家や豪商によって珍重されるちょろけんであるが、その名は一部の愛好家だけに知られるというものではなかった。江戸期の女子の教養書の一つである『女重宝記』³¹⁾〔元禄5年(1692)刊〕では「絹布類」の項に「長羅絹」をあげているし、元禄8年(1695)刊行の裁縫書『当流絹布裁様』(車屋町夷川角、林久次郎板)は布地の種類として「ちょろけん」をあげ「着物用」としている⁵⁰⁾。また『節用集大系』³²⁾によると元禄3年(1690)刊『頭書大益節用集綱目』(前掲)で⑤の項に「直綴・長絹・縮綿・縹・著羅絹」としてあげられるのが最初で、以後この『節用集大系』に収録されている元治元年のものに至るまで数十種の刊本にほとんど「著羅絹」あるいは「鎖服³³⁾」は登場する。この『節用集大系』を見る限り江戸初期には衣服門に関してはまだ装束系の語彙が多い。外来のものとしては「金襴・段子・兜羅綿」が比較的早く採用されているが、延宝8年(1680)刊の『合類節用集』³⁴⁾では「従来の節用集は用語の範囲が狭く、語彙も少ないため、実際の使用に十分応えられないので長年にわたり書き綴って本書を編んだ」と述べており項目も増加し、渡来裂に関しても例えば、羅紗、羅背板、蜀江錦、縹珍、紗羅、天鵲絨など以前にみられなかったものが登場している。そして元禄3年(1690)刊行書で「著羅絹」が採用されて後、⑤行に「茶宇嶋」が登場するのは元禄10年(1697)刊『頭書増字節用集大成』³⁵⁾である。その後、正徳6年(1716)刊『童子字尽安見』³⁶⁾では絹布門として非常に多くの渡来裂の名があげられる³⁷⁾。このように多少の時間差を持ちながら渡来裂名が採択されているが、ある語彙が節用集に採用される時、その背景にはその語やその語の示す「物・実体」の存在が広く一般に認知され、それ故にそれを知識として理解することがより広範に要求されるという状況がある。「ちょろけん」が語彙として比較的速く定着したのにはそういう背景があったであろう。そしてこの語は知識として広まりをみせるのであろう。

(4)

このように節用集によると「ちょうけん」は比較的早く知識として定着すると考えられ、また裁縫書などに登場するにもかかわらず実際の使用場面での用例がいたって少ないのは、この織物の性質に関わるころが大きいのではなかろうか。「ちょうけん」は例示した実物資料によると総体に地質が厚手でゴワゴワした感じである。着るものとしては体にまといつかず体との間に空間を保つような形の服には適するが、時代的好尚が次第に体にまといつく柔らかな着物へと向いつつある時代に、この珍奇な裂への需要はもう一つ進まなかったのではなかろうか。江戸中期以後、幕府への貢納品からも姿を消し、その他の記述が少なくなることも、こうした時代的好尚と無関係ではなかろう。そしてそのことはこの裂がおそらく模織されなかったのではないと思われることとも関係がありそうである。

外来の優れた染織品は、唐物といわれた渡来裂から紅毛渡来の裂類まで多くの模織が行われ、それが近世わが国の染織事情を空前の豊かさに導いたのである。京都を中心にすすめられた模織の状況を示す主な記述をたどると、まず江戸初期寛永15年(1638)刊の『毛吹草』があり、「山城」の産物として数々の模織品をあげている³⁸⁾。貞享元年(1684)刊の『雍州府志』³⁹⁾は絹帛と金欄唐織の項をあげ、後者では、

近世西陣人倣中華之巧而金欄緞子縐子細綾
縐紗紋紗類無不織之倣阿蘭陀製而天鷲絨羅
紗及木綿織物悉織之一種有稱唐織者以
五色絲織成花鳥或菱花等雜品之紋倣蜀江錦
者也(中略)今所用之金欄以西陣野本氏為
始唐織以倭屋為本

と中華・阿蘭陀のものなどの模製の状況を述べている。元禄4年(1691)刊磯貝舟也著『日本鹿子』にも山城の産物として染織物の記述⁴⁰⁾がある。しかしこれらに「ちょうけん」の名は見えない。

享保期になると三宅也来著『万金産業袋』⁴¹⁾は衣服門を「唐物類」と「京織類」を分けて記し、「唐物に似せ和にて織所の品はかねざしなり」として、それに印を入れている。それらは

錦 緞子 縐珍 紗 金欄 毛織 縮綿 綸子
紬 茶宇島 片色 練 綾

で、縐子・緞子は「唐より見事」であり天鷲絨も「唐より和織の方はるかによろし」との記述がある。また「本茶宇 茶宇綿 木めん毛織 粉とろめん 堺とろめん 和とろめん 印金織 樊噲織 京さがら 京かび丹 京弁がら いんでん染 和棧留」など渡来裂の名を付したものがあげられ、「織色郡内」が海気に似ていて「ぐんない海気」と呼ばれるとも記す。なお文末に「右和織類十がひとつにもあらずといへども、あらましを今記之。なを遣たるは後編に至て全く有

へし。」としているところから察するとまだまだ多種の織物があったと思われるが、はたしてその中に「ちょうけん」があったかどうか、少なくとも模造品として量産されているものではなかったことは明らかである。さらに降って宝暦4年(1754)刊の『日本山海名物図会』(平瀬徹斎編、長谷川光信画)⁴²⁾は、京の西陣の織屋について記し、「京都にて織出す織物、甚だ巧奢にて、唐綾にまけず、中にも羽二重は、もろこしにもまさりて、こまやか也」として其品々をあげているが⁴³⁾、ここでも「ちょうけん」の名は見えない。

一方同じ渡来絹類として「ちょうけん」と並列して記されることの多い海気や茶宇やかべちょうけんの場合は使用の実例が多い。その一つは茶の世界である。名物茶入の袋に貴重な渡来裂が使われたことは周知のことであるが、この袋の裏にこれらの裂は多く使われた。『名器録』⁴⁴⁾『古今名物類聚』⁴⁵⁾『槐記注釋』⁴⁶⁾などに多くの例がみられる。また衣服にも好んで用いられたらしく、武家の服装規定の中にその名がみえる。例えば金澤藩『典制彙纂』⁴⁷⁾によると、万治3年(1660)正月朔日に出された「御赦免衣類之覚」に

大身小身并子共

一 さあや 一 八てう嶋 一 ころさい 一
ちりめん 一 ちやう嶋 一 のしめ 一 かべ
ちょう 一 ゑるさい 一 あや嶋 一 ころた
ん 一 あるえとりん 一 ねり嶋 一 ど、
一 とろめん 一 はふたへ 一 おく嶋 一
らしやいた 一 日本絲織物

歩子々姓右同断

御昵近之 子 小姓并法躰人、唐物御赦免、出家・町医者共同断之事

とある。寛文8年(1668)の「覚」には、

一 奥嶋之類并ちやう嶋、裏着用不苦由、さや、ちりめん有来候衣類は、ゑりをさし下着候尤苦由事

同年3月16日の「覚」には、

一 奥嶋類之事

一 ちやう嶋之事

奥嶋はもめんノ類二候、其上末々者着仕候て勝手之ため宜もの二候不苦候、ちやう嶋裏など二付候義、京織之類二候へハ、勝手能候ハ、着用不苦由、同年3月2日「北條安房守殿え尋候て被仰聞覚」には、

一 奥嶋之類、侍分ハ苦間敷候、当分袴裏ちやう嶋、かた色など付置候着用候ても不苦事

享保14年(1729)以降か「年未詳」とされる「覚」には、

一 於江戸御供・御使・御給付等二絹・紬用可申候、唐絲織之類ハ用申間敷旨被仰渡候得共、上下・羽織等之裏ニハ、其以後も唐かい子并茶う嶋等用ひ候様仕度奉存候(後略)

の条がみえる。武士の衣類として渡来裂が好まれ、特

に海気や茶宇は裏地として許されている事情がわかる。

徳島藩『御国中御家中』⁴⁸⁾でも元禄9子年(1696)

12月15日条に

一 茶宇・かいき之義、上下之裏迄二着用可仕候、児小姓中も同断、かいき一重袴も御停止之事とあり、茶宇・かいきが裏にまでは許されている。

岡山藩「法例集」⁴⁹⁾では享保8卯9月(1723)の条に、

一 かへちよろ茶丸茶宇裏之事

一 奥嶋之類之事

右急に仕替候義何も難儀可仕候間、頭分初持掛り者已之年春まで先用ヒ候事勝手次第

享保16亥(1731)の条に

一 呂之肩衣、す、し羽織、野細美上下、し、ら木綿、奥嶋之類、かへちよろ類着用可為勝手次第事

とある。

「ちよろけん」はその地質の性質から、これら海気、茶宇、かべちよろのように裏生地として使われる性格の裂ではなかったのである。こうした事情から珍貴な渡来裂として早くにその名は知られながら、実際には人目にふれる機会は少なかったのではなかろうか。実体としての「ちよろけん」と知識としての「ちよろけん」との間に齟齬を生ぜしめるには、「ちよろけん」そのものの定義の不確かさに加え、こういう事情があったのではないと思われる。

このように「ちよろけん」を追ってみると、丹波福知山地方の在方民によって織られた「ちよろけん」と江戸期渡来裂「ちよろけん」とはその特徴である「木目文様」という一点でのみ繋がる。その実体は徳川美術館蔵品の「銀モクチョロケン」「金モクチョロケン」や東京国立博物館蔵の『端物切本帳』の「金チョロケン」に見るような木目文様ではなく、京都国立博物館蔵の前田家伝来名物裂「チョロ織」の一つにみられる空糸を使った木目文様である。丹波の織物における「ちよろけん」という命名は「ちよろけんとは木目文様の裂である」という知識によって導かれたのであろうか。いずれにしてもこれら珍貴な裂類は貴族が衣裳や調度品のために集めた渡来裂である。その渡来の裂やその異国的な呼称への憧れが基底にあることは確かであろう。都市で製織される縮緬や緞子といった裂類は高度な技術が要求され素人の手織で織れるものではない。しかもその使用は江戸時代農民にとっては厳しい規制のもとにあった。彼らが自らの技術で製織可能であり、自らの美的欲求と技術的自負心を満足させるものを織り出そうとした時、この空糸を使った「木目文様」があったのであろう。そして「木目文様」とは渡来裂「ちよろけん」の特性だったのである。それにしても、丹波の「ちよろけん」は、空糸(ちよろけん

糸)を使った木目織りを自らのものとして美事に消化し切っている。

(文中傍点…筆者による)

(以上)

謝辞 資料閲覧のお許しと、いろいろな御教示をいただきました東京国立博物館、京都国立博物館、徳川美術館、国立歴史民俗博物館に心より御礼申し上げます。

注

- 1) 福知山市在住の染織作家河口三千子氏が御夫君と共に長年にわたり収集されたものである。福知山市の管理に移譲されたのを機に平成4～5年に調査・整理を行い、調査報告『丹波生活衣コレクション調査報告書』が平成6年3月に福知山市より刊行された。
- 2) 徳川義宣著『駿府御分物帳に見られる染織品について』昭和53年3月30日刊『金鯢叢書』第四輯所収による。
- 3) 新訂増補国史大系第四十巻『徳川実紀』第三篇 吉川弘文館刊 昭和5年
- 4) 同上 第四十一巻『徳川実紀』第四篇 吉川弘文館刊 昭和6年
- 5) 同上 第四十五巻『徳川実紀』第八篇 吉川弘文館刊 昭和8年
- 6) 内閣文庫発行 昭和45年
- 7) 同上書所収 山脇悌二郎著『唐蛮貨物帳』解題
- 8) 同上書によると、乗組員らの私貿易で協荷という。当時、オランダ東インド会社では私貿易は禁止されており、出島商館の記録にはない。
- 9) 『日本経済叢書巻五』 日本経済叢書刊行会刊 大正三年 所収
- 10) 東京美術刊 昭和45年
- 11) 近松在命中の享保寅年は7年(1722)である。
- 12) 『近松全集』第十二巻 朝日新聞社刊 昭和3年
- 13) 国会図書館蔵書
- 14) チャウル産かとする説もある。
- 15) 美術館の見解では織物の性状から「毛織」は「モール」。
- 16) 東京国立博物館所蔵の「端物切本帳」は寛政9年(1797)から安政6年(1859)の63年間に長崎に入港したオランダ船・唐船の輸入反物裂および琉球産物の反物裂を見本帳に仕立てたもので計136冊に及ぶ。調査の結果「ちよろけん」に関する掲載はこの二例のみである。なお国立歴史民俗博物館蔵の天保8(1837)年および天保11(1840)年の切本帳にもみられなかった。
- 17) 小笠原小枝・石田千尋著『紅毛船・唐船・琉球

産物 端物切本帳について』MUSEUM No456
1989年3月号

- 18) 京都大学蔵 類原写本による。
- 19) 高野伸二監修『カラー写真による日本産鳥類図鑑』東海大学出版会刊 1982年2月
- 20) 『節用集大系』22 大空社刊 平成6年 所収。
苗村丈伯跋, 京都津田宗智・山本五兵衛板。
- 21) 10) に同じ。
- 22) 「第百二十一号, 四号, 唐カイキ」の墨書包紙
- 23) 10) に同じ『和漢三才図会』所収, 樋口秀雄氏の解説による。
- 24) 京都国立博物館編 紫紅社刊 昭和54年
- 25)

| | 七ツ目入り変り格子 文様チョロ織 | 縞格子チョロ織 | 木理に四ツ目文様 チョロ織 |
|------|---------------------|-----------|------------------|
| 密度 | 経85本 緯37越 | 経42本 緯22越 | 経40本 緯22越 |
| 織幅 | 55.2cm | 60.8cm | 36.9cm |
| 織耳 | 0.2cm | 0.2cm | 0.1+0.2cm |
| 時代 | 明時代 | 明時代 | 明時代 |
| 包紙墨書 | 「チョロ織」 「第四拾貳号」四号 | 「四号」チョロ織 | 「四号」チョロ織 |
| 貼札墨書 | 「第九十五号㊦」 | 「第九十四号㊦」 | 「第九十六号㊦」 |

(『京都国立博物館蔵前田家伝来名物裂』により作成)

- 26) 『名物裂類集』 京都書院刊 昭和41年
- 27) 『陽明文庫展—近衛家伝世名宝に裂地をみる—』
川島織物文化館刊 1995年
- 28) 26) に同じ。
- 29) 以上は『家康の遺産—駿府御分物—』徳川美術館編・徳川博物館刊 平成4年 による。
- 30) 日本古典文学大系47『西鶴集上』 岩波書店 昭和45年
- 31) 東横学園女子短期大学『女性文化研究所叢書第三輯 糸入女重宝記』 平成元年
- 32) 大空社刊 平成6年
- 33) 「著羅絹」か「鎖服」かについて。『懷宝節用集綱目大全』寛延3年(1750)1月原板 京都・出雲寺和泉椽原板 文化9年(1812)12月刊 京都・出雲寺文次郎板(『節用集大系』所収)は,
「鎖服, 柳條鳴 己上の二種乃字いこく風土記ニ出タリ俗ニ著羅絹・茶宇と書ハ非也」としている。
『異国風土記上』正徳貳辰ノ拾月吉祥日(1712)中尾氏豊位(京大蔵写本)によると「大清十五省府別縣数土産」として「古呉越之地浙江省」の土産として「羅絹」がみえる。
- 34) 若耶三胤子編 京都・村上勘兵衛板 延宝4年(1676)の編者自序がある。(『節用集大系』所収)

- 35) 江戸・中川五郎兵衛 大阪・岡野安兵衛・小林宇兵衛板(『節用集大系』所収)
- 36) 江戸・須原屋茂兵衛板 松井庄左衛門(自更軒免睡)編・序, 菊需淮堂跋(『節用集大系』所収)
- 37) 「錦, 蜀江錦, 金欄, 綾, 紗綾, 綸子, 綾子, 光綾, 縹紗, 縮綿, 金鍛, 純子, 雲段, 八絲, 縹子, 七絲, 縹珍, 紗, 金紗, 羅, 熨斗目, 錦繡, 詠織, 羅紗, 羅背板, 柳條, 茶宇, 紬, 縹縹, 兜羅綿, 襪褐, 加昆旦, 鹿皮旦, 鎖服, 著羅絹, 檀葛刺, 莫臥爾, 占城, 咬喘吧, 邪雅塔刺, 文派, 西洋, 八丈, 金照氣, 海氣, 畦織, 算崩, 函柳條, 格子 等」
- 38) 新村出校閲 竹内若校訂 岩波文庫 1988年版によると「紗羅染 西陣撰絲 厚板物^{綾島^{練島}} 金欄 唐織 紋紗 戻 絹縮 羅板物^{縹縹}等」などがみられる。
- 39) 新修京都叢書刊行会『新修京都叢書3』光彩社刊 昭和43年
- 40) クレス出版 平成8年 によると, 山城の産物として「諸色染物 羽二重 撰絲 縮緬 其外織物色々也」としている。
- 41) 『生活の古典双書5』八坂書房刊 昭和48年 所収『万金産業袋』は享保17年(1732)ごろの刊行とされる。
- 42) 『近世歴史資料集成第Ⅱ期第Ⅰ巻日本産業史資料(1)総論』 科学書院刊 1992年 所収。訳・編 浅見恵, 安田健
- 43) 「緞子 緞珍 金欄 縮緬 紗綾 綸子 縹子 毛織 紋絹 光綾 茶宇 光絹 竜紋 熨斗目 天鷲絨 綿綾 紗 茶丸 白呂 兜羅綿 片色 練 絵絹 節絹」があげられる。
- 44) 蜜茶会編 大正9年 (別所吉兵衛, 文祿から承応のころの記)
- 45) 正宗敦夫編集・校訂 日本古典全集刊行会刊 昭和12年 による。
- 46) 佐伯大太郎注釋 立命館出版部刊 昭和2年 による。本書は「豫楽院近衛家熙公口授 保寿院山科道安老筆記」になるもので, 茶会の記録が多出。
- 47) 藩法研究会編『藩法集4』 創文社刊 昭和38年
- 48) 藩法研究会編『藩法集3』 創文社刊 昭和37年
- 49) 藩法研究会編『藩法集1』 創文社刊 昭和34年
- 50) 関口富左著『女子教育における裁縫の教育史的研究』家政教育社刊 昭和55年 による。